

学籍番号：4312100050

氏名：石神 よし乃

実習先：硫黄島・竹島

実習期間：平成29年6月16日～6月22日

【自然環境】

三島村は薩摩半島南端の長崎鼻から南南西約40kmの位置にある竹島・硫黄島、坊ノ岬から南西約50kmの位置にある黒島の三島及び無人の新硫黄島や数個の岩礁から成り立っており、九州南端から南西にのびる南西諸島の最北部に位置している。

竹島と硫黄島及び周辺の岩礁は中新期琉球火山脈に属する大型カルデラで、六千三百年前に大噴火した鬼界カルデラの北西縁にあたる陸上部分をなしている。

本村の気象は、おおむね亜熱帯的海洋性気候で、東は太平洋、西は東シナ海に面し、黒潮の影響を受け気候は極めて温暖である。しかし、台風の進路に当たり、また、冬の季節風が強いため四季を通じて風潮害がきわめて大きい。

【社会的背景】

硫黄島の人口は128人、竹島の人口は87人であり、三島村全体の高齢化率は34.8%である（平成18年）。三島村全体として人口は減少傾向で、高齢化率は上昇している。村内には高等学校がなく、毎年10人前後が中学校卒業と同時に村外の高等学校進学のために村を出て行くが、卒業後に帰村する者は少なく、「若者が去り老人が残される」という過疎地特有の人口減パターンとなっている。

畜産がさかんで、三島の黒毛和牛は市場で高く評価されており、「みしま牛」のブランド確立が今後の畜産振興の課題である。

林業は、高齢化による労働力の低下と人手不足で生産量も年々減少の一途をたどっている。硫黄島には自然林及び人工林合わせて約46ヘクタールの椿林があり椿の実の採実量は多い年で16トンにもなる。その椿の実を絞って作る椿油は、村の特産品の一つとして販売されており好評を得ている。

【住民の生活】

・MISHIMA CUP（ヨットレース）

県内外から約50艇のヨットが参加し、山川港沖から竹島港沖までのレースを展開する。夜は硫黄島で村特産の魚や竹の子等、山海の珍味をふんだに使った「バーベキューパーティー」や、降るような星空に向けて打ち上げる花火大会、野外ステージでのコンサート等が行われ、人口150人程度の島が当日は700人を超える人で賑わう。村民にとっても楽しみな、年に一度の大イベントである。

・アフリカ音楽との交流

日本初、アジア初のジャンバスクール「みしまジャンバスクール」を開校している。今後、ジャンベを通して更に交流が進み、村の活性化につながるものと期待されている。

【医療供給体制】

村内の各島（各地区）に合計4箇所の診療所が設置され、それぞれ看護師を配置している。診療所には巡回診療の予定が掲示されており、島民は希望の診療科が巡回してきた際に、診療所に向向

き診察を受ける。また、診療所にはライブカメラが設置されており、緊急時には医師の指示を仰ぎながら看護師が行動できる体制が整っている。薬剤も常備してあり、島民は薬を診療所で購入することができる。

緊急時には硫黄島には飛行場、竹島にはグラウンドにヘリコプターが着陸する。

【実習概要】

日付	内容
6/16	硫黄島へ移動・午後から体育館にて診療
6/17	終日診療
6/18	午前中診療、午後から竹島へ移動
6/19	終日診療
6/20	悪天候のため診療中止、宿に待機
6/21	悪天候でフェリーが動かないため、宿に待機
6/22	鹿児島市に移動

【振り返り記録】

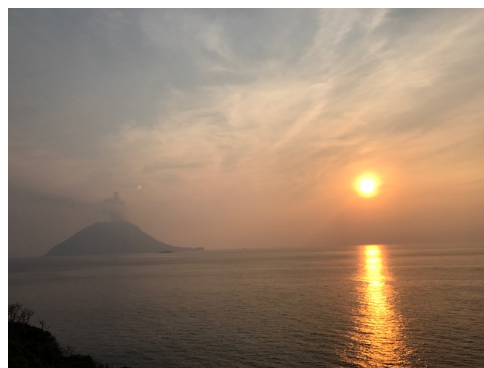
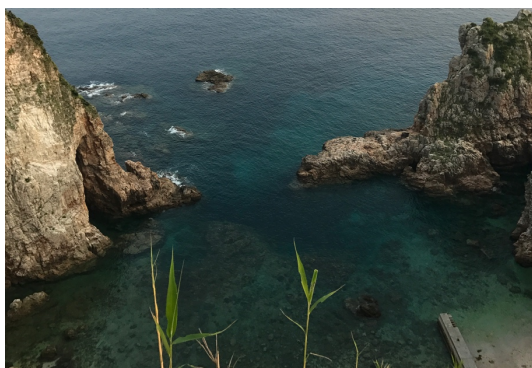
私は初めて三島村の硫黄島と竹島を訪れました。硫黄島は雄大な硫黄岳と神秘的な赤い海がとても美しく、ジャンベの音楽が島中に響き渡るエネルギッシュな島でした。竹島は澄み渡る海に色とりどりの魚たちが優雅に泳ぎ、夕方には夕日が地平線に沈みゆくのを眺めることのできる美しい島でした。



硫黄島の風景



港でのジャンベの演奏



竹島の海と夕日

今回の実習で一番印象的だったのは、無医地でのポータブル治療の限界を感じたことです。今回の離島診療ではこじか号が同行せず、ポータブルユニットを持参して診療を行いました。ポータブルユニットでは、処置中に注水用の水が無くなったためタービンが動かなくなったり、バキュームの排水が満水になったりして、治療を一時中断しなければならないことが多々ありました。また、診療で使用したい薬剤や材料がスムーズに見つからなかったり、器具の滅菌消毒が追い付かず、別の器具で代用することなどがありました。普段私たちがとくに意識することなく行っている、患者さんを歯科用チェアに誘導し、滞りなくバキュームやタービンを使用できる、という行為はとても恵まれた環境であることを知りました。

また、とても感心したのが、就学時検診に来る子供たちの口腔衛生状態が全員非常に良かったことです。カリエスがある子はほとんどおらず、シーラントやフッ素塗布などの処置を受けている子がとても多かったです。離島という環境下で、簡単に歯科医院に行くことができないため、保護者も子供たちの口腔内には気を付けている印象を受けました。診療用の椅子に座ることを怖がる子も一人もいませんでした。大学病院の小児歯科で会う子供たちはチェアに座らされるだけで泣き出す子が多いです。もしかしたら子供たちが泣き出す原因は、診療室の独特の雰囲気やユニットの器具が怖いということも要因の一つなのかなと思いました。離島診療では、子供たちもなじみの場所でのんびりとした雰囲気で診療を行うので恐怖心が生まれにくいのではと考えました。

島の看護師さんは高齢者の方々をよく気にかけており、看護師さんの呼びかけによって来てくださった患者さんもいらっしゃいました。私がブラッシング指導をさせていただいた高齢の男性の患者さんは、重度の歯周病が見られましたが、今までブラッシング指導を受けたことがなく、とても勉強になったと喜んでおられました。患者さんが少ない離島診療では、歯科医院での診療と異なり、一人一人の患者さんに時間をかけて処置を行うことができます。私たちのような学生は、診療のアシストだけではなく、ブラッシング指導や清掃器具の説明などでも貢献できるので、そのような時間が増えれば良いなと思いました。



診療風景 診療所は子供たちの遊び場でもある

今回の日程は、当初は4泊5日の予定でしたが、悪天候で鹿児島市内へ向かうフェリーが欠航となってしまったため2泊延泊となりました。島で生活する厳しい一面も体験することができました。天候次第で予定が何日も変更になってしまうことは日常茶飯事であり、自然とともに生きていく難しさを感じました。

島の方々はみなさんとても親切で、大変良くしていただきました。宿で頂いた料理はどれも絶品で、特に旬のたけのこは今まで食べたたけのこの中で一番甘く、渋みなどもなくとても食べやすかったです。とれたての魚をさばいたお刺身もとてもおいしかったです。



今回の離島診療に参加し、学んだことを忘れず、今後の歯科医師人生に役立てていきたいと思えます。硫黄島・竹島の皆様、ありがとうございました。